令和2年度 佐賀県障害者芸術文化活動普及支援事業 報告書

SAGA ART BRUT NETWORK

2020 — 2021

SANC
Saga ArtBrut Network Center

はじめに

SANC（Saga ArtBrut Network Center）は佐賀県において障がいのある人たちの芸術活動の輪が広がっていくことを目指し、芸術活動に取り組んでいる障がいのある方、支援をしている方、関心のある方を主な対象として、「相談対応」「人材育成研修」「発表機会の創出」「ネットワーク作り」「拠点の運営」などを行っています。

本書では令和２年度に取り組んだことをご紹介します。

令和２年度 佐賀県障害者芸術文化活動普及支援事業 報告書

SAGA ART BRUT NETWORK 2020—2021

目次

1 はじめに

3 SANCについて

4 令和2年度にSANCが取り組んだこと

6 障がいのある方の表現とは？ を考えるオンラインセミナー

何だか気になる表現者たち

7 表現は、生きるチカラ

カタチにならない表現をひろう

8 がばいアーティストたち展を一緒につくりませんか？

10 障がいのある方とのアートを楽しむための 創作体験ワークショップ

14 日常生活の中で、どんな地味なことでも魅力に変える 身体表現ワークショップ

18 障がいのある方の創作活動にまつわる 権利擁護について

20 がばいアーティストたち これ誰が描いたの？ vol.3

26 第4回 スター発掘プロジェクト in 佐賀

30 佐賀大学芸術地域デザイン学部 地域創生フィールドワーク「障害とアート」

34 アトリエ・サンク「ゆっつらアートデイ」

38 相談支援

39 情報発信資料

40 SANCのご案内

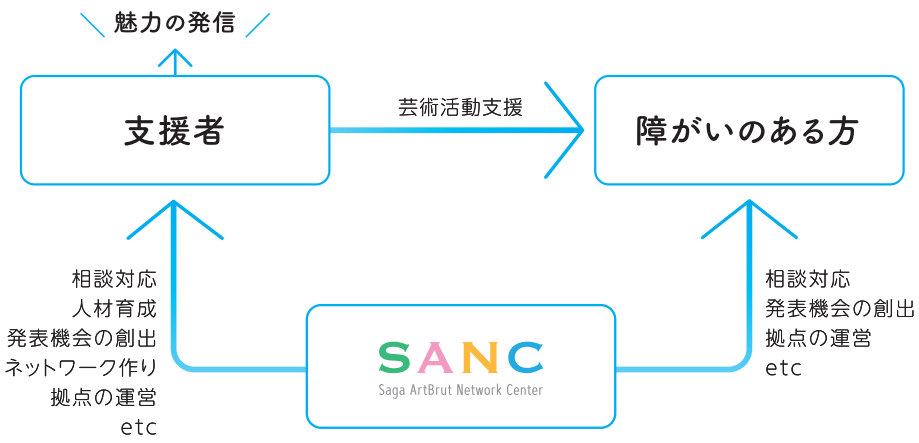
42 おわりに

SANC（サンク）について

2015 年 8 月、社会福祉法人はるは、厚生労働省「障害者の芸術活動支援モデル事業」の助成を受け、障がいのある方が芸術活動を通じて豊かに生活できる社会を目指し、“Saga ArtBrut Network Center（SANC）”をオープンしました。

2018 年からは「佐賀県障害者芸術文化活動普及支援事業」の支援センターとして、その活動を継続し、佐賀県において芸術活動に取り組んでいる障がいのある方、支援者の方、関心のある方などを対象に、「人材育成」「相談対応」「発表機会の創出」「ネットワーク作り」「拠点運営」など、障がいのある方の芸術活動普及支援のための、さまざまな取り組みを行なっています。

障がいのある方の芸術活動を支えるために



SANC は、障がいのある方の芸術活動を支援されている方たちへのサポートを軸として活動しています。その取り組みを通じて、障がいのある方と芸術活動を共に楽しみ、その表現の魅力を世の中に届けてくださる“支援者”が増えることで、障がいのある方が芸術活動に取り組みやすい環境を広げていきます。

令和２年度に SANC が取り組んだこと

今年度、SANC は１年を通して「芸術活動に関心はあるが、取り組んでいない」事業所や支援者の方が芸術活動の“一歩目を踏み出す”ためのサポートと、作者や支援者、障がいとアートに関心のある人など、芸術活動に関わる人同士の“ネットワーク作り”に重点を置いて活動しました。

研 修

障がいのある方の表現とは? を考えるオンラインセミナー

会 場　オンライン（YouTubeでのライブ配信）

何だか気になる表現者たち

講 師　櫛野 展正氏
聞き手　花田 伸一氏
日 時　令和2年9月5日（土）19:30 ～ 21:00

表現は、生きるチカラ
はーとあーと倶楽部、７年のあゆみから

講 師　大江 登美子氏
ゲスト　はーとあーと倶楽部の保護者の皆さん
日 時　令和2年9月12日（土）19:30～21:00

カタチにならない表現をひろう
「まなざし」を分かち合うツールとしてのアート

講 師　アサダ ワタル氏
小松原 修氏
鈴木 励滋氏
日 時　令和2年9月19日（土）19:30～21:00

がばいアーティストたち展を一緒につくりませんか?

講 師　柳 健司氏，阿部 浩之氏，花田 伸一氏
会 場　オンライン（Zoom）＋ アトリエ・サンク
日 時　令和2年10月～ 12月（全3回）

障がいのある方との アートを楽しむための 創作体験ワークショップ

講 師　大江 登美子氏
会 場　アトリエ・サンク
日 時　令和2年10月～ 12月（4回）

日常生活のなかで、どんな地味なことでも魅力に変える 身体表現ワークショップ

講 師　小松原 修氏
会 場　オンライン（Zoom）＋ アトリエ・サンク
日 時　令和2年10月～ 12月（4回）

障がいのある方の創作活動にまつわる 権利擁護について

講 師　安永 恵子氏，樋口 龍二氏　会 場　オンライン（Zoom）＋ アトリエ・サンク　日 時　令和2年10月～ 12月

発表機会

展覧会

がばい
アーティストたち
これだれが描いたの？

会場　佐賀大学美術館 1F

日時　令和3年1月19日～1月23日

パフォーマンス発表

スター発掘
プロジェクト in 佐賀

〈ステージ・パフォーマンス〉

会場　アバンセホール

日時　令和3年2月13日

〈動画上映会〉

会場　オンライン（Zoom）＋ アトリエ・サンク

日時　令和3年2月27日

事務局

佐賀大学との連携

芸術地域デザイン学部地域創生フィールドワーク
「障害者とアート」

オープンアトリエ
ゆっつらアートデイ

相談対応

情報発信・情報収集

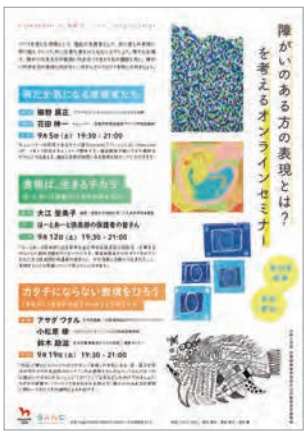
ネットワーク作り

創作の場・創作体験

協力委員会

障がいのある方の表現とは？を考える オンラインセミナー

障がいのある方とともに、表現を楽しみ、豊かさを育んでいくために必要なこととは？
様々な立場で、障がいのある方の表現に向き合ってきた5名の講師とともに、
障がいのある方の表現に向き合い、活かしていくためのヒントを探ります。



描く、歌う、発する、動く……。
障がいのある方の表現にふれたとき、彼らの行動をどのように汲み取っていけばよいでしょう。 アートを楽しむ仲間として、福祉の支援者として、ともに楽しみながら表現に取り組んでいくために、どんなことが必要でしょうか。
様々な立場で、障がいのある方の表現に向き合ってきた５名の講師の話から、ひとりひとりの表現に向き合い、活かしていくヒントを得るための研修を開催しました。

何だか気になる表現者たち

キュレーターの語源であるラテン語の curar（クラーレ）とは、"take care of"、つまり「世話する人」という意味です。
福祉現場で働いていた櫛野氏だからこそ出逢える、福祉と芸術の狭間にある表現を紹介していただきました。

講 師　櫛野 展正氏
（アウトサイダー・キュレーター / クシノテラス代表）

聞き手　花田 伸一氏
（キュレーター / 佐賀大学芸術地域デザイン学部准教授）

［日時］令和２年９月５日（土）
［申込］111 名　［ 当日の視聴者数 ］94 名
［会場］オンライン（YouTube でのライブ配信）

参加者感想より

○ 作品が「アート」として認められ、活躍されている方でも、職員に興味を引き出してもらうという最初の一歩がなければ世に出なかったと思うと、環境や出逢いも大切な要素だと思った。 ある施設では「問題行動」とされる行為が、別の施設ではしっかりと向き合うことで問題行動との認識でなくなる、ということが大変興味深い。

○「健常者の世界に呼びこむのではなく彼らの世界にお邪魔する」という言葉が印象的でした。

○ 福祉の現場ではアートは支援のひとつというお話が心に残っています。その人がどうしたいのか、どうすればより幸せなのかということが大切ですね。

表現は、生きるチカラ　はーとあーと倶楽部、7年のあゆみから

「はーとあーと倶楽部」は佐賀県立金立特別支援学校の在校生・卒業生を中心とした創作活動を行うサークルです。倶楽部発足からサポートされている大江先生とメンバーの保護者の皆さんに、発足の経緯や活動から生まれたこと、表現に取り組むことの意義について語っていただきました。

講師　大江 登美子氏
（画家 / 佐賀女子短期大学 こども未来学科准教授）

ゲスト　はーとあーと倶楽部の保護者の皆さん

［日時］令和2年9月12日（土）
［申込］96名　［当日の視聴者数］65名
［会場］オンライン（YouTube でのライブ配信）

参加者感想より

○ きれいな完成品を目指していたのですが、先生の話から、本人が楽しんでいるか？　その方を尊重しているか？　との問いかけに、今後の支援のあり方を見直したいと思います。

○ ご本人や周りの方の笑顔が印象的でした。障害者の方や周りの方に、アート制作がこんなにも豊かなものを生んでいるのかと感動しました。一方で保護者さんの座談会や質問コーナーでは画材を揃えることや描くときのサポートなど、色々な支援が必要だったことも改めて分かりました。

○ 自由に楽しく創作活動に取り組む環境作りの大事さを感じます。

カタチにならない表現をひろう　「まなざし」を分かち合うツールとしてのアート

「作品」「舞台」といったわかりやすい「表現」の手前にある、彼・彼女が生活の中で行う行為全体に対して「これも表現かもしれない」「なんだかこれは面白いのかもしれない」というポジティブなまなざしを向けてみましょう。カタチの有無や、「アート」であるか否かを問わず、障がいのある方の表現に関わってきた3名の講師に「カタチにならない表現」をテーマに語っていただきました。

講師　アサダ ワタル氏
（文化活動家 /（社福）愛成会品川プロジェクトアートディレクター）
小松原 修氏（ドラマディレクター / うれしの特別支援学校）
鈴木 励滋氏（生活介護事業所カプカプ所長 / 演劇ライター）

［日時］令和2年9月19日（土）
［申込］157名　［当日の視聴者数］159名
［会場］オンライン（YouTube でのライブ配信）

参加者感想より

○「目の前の人間を肯定したい。そのためにアートは使い勝手が良い。」「生きることを存分に表現する場所が増えていって欲しい。」「自分の価値観が崩されて笑う」印象深い言葉でした。

○ 問題行動とされがちな行動を表現活動ととらえる。そのような「まなざし」ということが非常に心に残りました。

○ 毎日を生きること、楽しむこと、面白がることが優先で、そこにアートや表現をいかに活用させるかを考えさせられました。

「がばいアーティストたち」展を一緒につくりませんか？

紹介したい作者がいる、作品を発信するスキルを身に付けたい
障がいのある方のアートな仕草や振る舞いを何とかして伝えたい
既存の枠を超えて、より広く作品を届けたい。そんな思いを形にします。

展覧会の開催に向けて、障がいのある方の保護者や福祉施設職員などを中心とする展覧会実行委員会を組織しました。実行委員のメンバーが持参した作品の紹介や、キュレーター・美術家などプロからのアドバイスを受けながら「なにを／だれに／どのように見てほしいのか」といった、展覧会の土台となる要素についての意見交換・情報共有を全３回の会議を通して行いました。また作品選出や作者紹介文の執筆、告知、展示作業、会場での来場者案内などの活動を通して、芸術活動の発信にかかわるスキルアップおよび参加者同士のネットワーク形成を目指しました。
今年度はオンラインでの参加を受け入れ、遠方に在住する作者など、これまで参加する上で課題があった方が新たに参加したことで、ワイヤーアートや自作のミュージックビデオなど、紹介される表現の形式にも広がりが見られました。

アドバイザー
柳 健司氏（美術家 / 佐賀大学芸術地域デザイン学部教授）
阿部 浩之氏（美術家 / 佐賀大学芸術地域デザイン学部准教授）
花田 伸一氏（キュレーター / 佐賀大学芸術地域デザイン学部准教授）

【第１回】作品を持ち寄って見せ合おう（1）　令和２年10月９日（金）
【第２回】作品を持ち寄って見せ合おう（2）　令和２年11月20日（金）
【第３回】展示準備を整えよう　令和２年12月11日（金）
［会場］オンライン（Zoom）＋ アトリエ・サンク　［実行委員会参加人数］25名

「がばいアーティストたち展」実行委員会（初参加の方）による振り返り

○ コロナ禍で全員集まってのミーティングはできませんでしたが、オンラインとアトリエ・サンクでの作家さんと知り合ったり意見の出し合いをしたり、貴重な経験になりました。好きで自由に楽しく描いている子どもの絵がＴシャツになったこと、とても嬉しかったです。
今回はゆめタウンではなかったので集客は少なかったかもしれませんが、ゆっくりとした雰囲気で見ることができました。原画まで展示されたことで、作家さんの世界観を見ることができたのもよかったと思います。

○ 今回、初めて「がばいアーティストたち」の実行委員として携わらせて頂きました。実際、絵画や作品を垣間見た際に、各作者からの“意思”“言葉”が表されている様な感覚でした。私が従事している事業所の方の作品も展示されていました。ご本人は、言葉でのコミュニケーションが難しい方ですが、作品を通して（非言語ではありますが）話し掛けられている様に感じました。
今回、展覧会という形式でしたが、言葉での表現が難しい方たちの“表現できる場所”として、また、“表現できる場所”を少しでも増やせる様、協力できたらと思いました。

○ 今回、はじめて参加させて頂きました。ミーティングは、これも初体験のアトリエ・サンク（サテライト会場）でのZoom通話参加で、動揺していましたが、どうにか先生や皆様に作品を見て頂く事が出来ました。会場設置の手伝いもさせて頂き、額の合わせ方、接着方法なども勉強になりました。
そして当日、利用者さん二人を連れて、観覧に行きました。二人ともとても緊張した様子で会場の中に入り、ちょっと顔を紅潮させながら写真に納まり、絵を描かせていただいたり、皆さんの作品を観させていただいたり、本当は、午前中だけだった見学もお二人の希望で、午後も見学となり、一日美術館で過ごさせて頂きました。
利用者さんがどんどん絵を描いている様子に関心して、来場者の方から、「写真撮らせて頂いてよいでしょうか?」と言っていただきました。利用者さんの嬉しそうな笑顔が素敵でした。とても貴重な体験をさせていただきありがとうございました。
今回の参加で、利用者さんも私も刺激を受けたり、感動したり、意欲がさらに湧いたりと良いことばかりです。

○ 今回初めて参加をさせていただきました。会場もとても綺麗で、こんな作品展をしなかったならば入ることがまずなかったんではないかと思います。
学生さんや保護者の方を始め沢山の方の協力があってこそのSANCらしい作品展ではなかったかなと感じもでていてよかったです。
あえて言うならば、壁側にもう少し大きめの作品が沢山あればインパクトもあったかなと感じます。そして、いろんな絵や写真やもっと表現ができるものをこれからは増やしたいなと感じました。
Ｔシャツの展示をしてみて色んな人の作品が集まり、また大きなひとつのものになることはとても素敵な経験となりました。

○ 会場でワイヤーアートのワークショップを行いました。ワイヤーアートとは?って感じで見てもらいたくやった企画でしたが、皆さん楽しくペンチを握り針金を触って頂いて、ワイヤーアートを堪能して頂いてました。
最終日でしたが、沢山の方々が色んな方達の作品見て、驚愕、共感されて帰るのを見て、素晴らしい光景だったなと。良い経験をさせて頂きました。また機会があればよろしくお願い致します。

○「がばい展」のようなイベントに参加するのは初めてでしたので、どんな方が参加されてるのか、徐々に展示会として成立させていく工程が勉強になりましたし、自分の作品がＴシャツになり、オンライン販売されるのも少し自信がつきました。

○ 今回初めて参加させて頂きました。現在、特別支援学校高等部２年の寛仁がこれから卒業し就職し今以上に自立していくための方向性をこのイベントを通して確認できればと考えておりました。
夢はアーティスト、絵を描く仕事に就きたいとの彼の希望を叶えることができるのかということへの挑戦でもあったと考えます。寛仁ははっきりと言葉には表しませんが自身の作品のＴシャツを着て自慢げな表情からは新たな成長を感じております。
このイベントに参加したことで実はアーティストとしての一歩を踏み出すことができたようにも思います。

障がいのある方とのアートを楽しむための

創作体験ワークショップ

障がいのある方との芸術活動に取り組んできた大江先生と一緒に、
アトリエ・サンクでアート活動を体験してみましょう。
わくわくを感じながら、アート活動の第一歩を踏み出すためのワークショップです。

「アートの楽しさに触れてみたい」
「興味はあるけど、どういうふうに支援すればいいのかわからない」
「もっといろいろな素材を使って、自由に表現してみたい」
そんな方を対象に、創作活動を体験できるワークショップを開催しました。

障がいのある方を対象とした造形活動の講師を多く努めてきた画家の大江登美子さんを講師に迎え、これから芸術活動に取り組みたいと考えている支援者の方を中心に20名が参加。アクリル絵具・スポンジ・キャンバスなど、さまざまな画材や素材に実際に触れて、自由な創作のわくわくを感じながら、自宅や事業所でのアート活動に使える道具や、支援のコツなどを楽しく学びました。

講 師　**大江 登美子氏**（画家 / 佐賀女子短期大学 こども未来学科准教授）

【ワークショップ①】令和２年10月27日（火）　参加：３名
【ワークショップ②】令和２年11月28日（土）午前　参加：４名
【ワークショップ③】令和２年11月28日（土）午後　参加：５名
【ワークショップ④】令和２年12月16日（水）　参加：７名
［会場］アトリエ・サンク

障がいのある方とのアートを楽しむための

創作体験ワークショップ

参加者感想より

○ 来た甲斐がありました。とても楽しかったです。汚れることを気にせず、思うがままに描くことを存分に楽しむことができました。充実した時間を過ごせました。 自由で発想の豊かな障がいを持つ方たちは僕らよりも楽しめるあるいは没頭できるのではないかと思いました。 材料の豊富さはそれだけ、障がいを持つ方たちの表現が豊かにできるのだと思いました。（支援者／作者）

○ たくさんの画材を使って表現することがとても楽しかったです。素材の可能性などを知りました。場の作り方など、すごく安心できる環境でした。（臨床美術士）

○ 上手く描こうという気持ちでなく楽しもうという純粋な気持ちで活動できました。画材など使用する素材で表現が変わっていくことを知り、絵を描くことの楽しみを教わりました。（弁護士）

○ 子供の発想力はすごいなとあらためて思った。絵にも準備体操は必要だと初めて感じた。知らないことがたくさんあって、またやってみたいなと思った。絵は楽しいと思えてよかったです。人とのつながりも感じました。（保育教諭）

○ 自由にすることで、アートが生まれてきました！
すごい。子供の発想に関心し、自分のキャパのなさを実感しました。（施設職員）

○ 色遊びのパワー全開でした。楽しかったです。
小さな可能性を見つけました。（保護者）

○ 素材やツールなどいろいろなやり方があることを知れてよかったです。自由に表現していいということが分かり、アートへの敷居が下がりました。（県職員）

○ いつぶりに絵具触ったんだろう…というほどの絵画でした。もともとは絵はヘタなのですが…。もっとアートを楽しみたいです。仕事でもプライベートでも取り入れたいです。（生活支援員）

「創作体験ワークショップ」講師 大江 登美子氏によるふりかえり

「～べき」「～ねばならない」から解き放たれること。今回のワークショップを終え、改めてこのことに向き合いました。障害のある方のより良い生活のためのアート活動支援には、まず支援者自身が素材に触れ、体験し、心から楽しいと感じることに始まるのだと確信したワークショップでした。アートに対して「～べき」「～ねばならない」という視点があると、自ずと支援者としてもこの視点で対象者へ接することになってしまうからです。

今回のワークショップではこの解き放ちに徹しました。徹するといっても方法はシンプルです。すなわち絵画とは支持体（紙やキャンバス等）・絵の具・着色のための用具を思い思いに使った結果なのだから、その組み合わせによって無限の描き方ができること、支援対象者に合わせてそれらを選定できることから、多くの素材を体験的に知って欲しいというねらいで、材料や用具を手軽に入手できるものから本格的なものまで取り揃えました。

さて、準備ができれば実際に素材に触れて心の動きのまま手を動かせばよいのですが、ここで冒頭の言葉が頭をよぎる人が多いのです。今回のワークショップでは、素材を知ってもらうために下地づくりにも取り組んでもらいましたが、それが思いがけず功を奏しました。出来栄えを意識せずにただパテのようなものを塗る作業が、準備運動のように心と手をほぐしました。用具も、筆以外にナイフ・ヘラ等を使うと感触や結果も異なるという面白さも感じてもらうことができ、その後の絵の具を着色する活動に抵抗なく移行してもらうことができました。

そして今回はいかに子どもたちが大人たちの心をほぐしてくれたことか。大人を縛るあの言葉をものともせず、心のまま材料や用具を駆使する姿は、決して大袈裟ではなく私も含めてその場の大人に希望と勇気を与えてくれました。君たちがいなかったらこのワークショップはもっとつまらないものだったと思います。本当にありがとう。

日常生活の中で、どんな地味なことでも魅力に変える

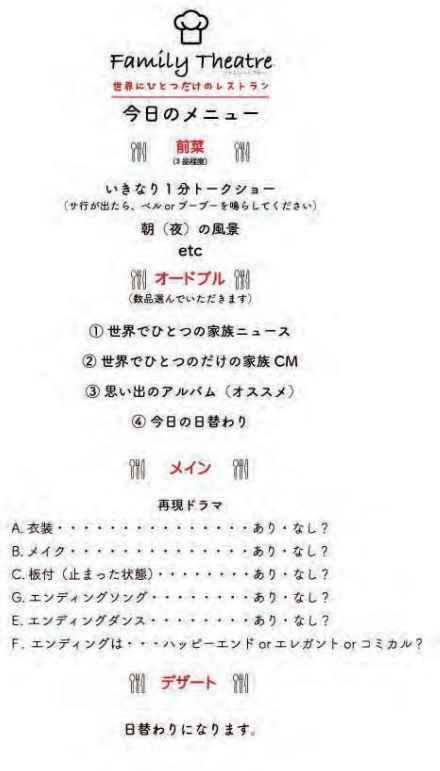
身体表現ワークショップ

絵を描いたりモノを作ったり、いわゆる「アート」なことはやってないけど、
この人の魅力をもっと輝かせたい！
既存の価値観に当てはまらなくても、それは立派な表現です。

相手のなにげない表情や仕草を、いつもより少し集中して観察してみましょう。
講師の小松原先生が10数年前から表現活動として取り組んで、
現在までに150ものご家庭を“舞台”に変えてきた即興劇「ファミリーシアター」をヒントに、
オンラインでのワークショップ・プログラムを開催しました。
障がいのある方やご家族、福祉の支援者、関心のある方などあわせて20名が
参加し、かかわりを楽しみながら「どんな地味なことでも魅力に変える」ための
視点を共有しました。

講師　**小松原 修氏**（ドラマディレクター / うれしの特別支援学校）

【ワークショップ①】令和２年10月17日（土）　参加：11名（アトリエ４名／オンライン７名）
【ワークショップ②】令和２年11月14日（土・午前）　参加：５名（アトリエ１名／オンライン４名）
【ワークショップ③】令和２年11月14日（土・午後）　参加：５名（アトリエ１名／オンライン４名）
【ワークショップ④】令和２年12月19日（土）　参加：４名（アトリエ１名／オンライン３名）
［会場］オンライン（Zoom）＋アトリエ・サンク



「スター発掘プロジェクト」講師 小松原修氏によるふりかえり

今年度は、コロナ禍でも、「開催する」方向は決してぶれることなく、このワークショップの趣旨である「どんなに地味なことでも魅力に変える」視点を生かした内容を模索しました。そのヒントになったのが、私自身が10数年前から取り組んできている「ファミリーシアター」という、障害のある子ども、特に重症心身障害など、社会とのつながりが薄くなりやすかったりする方々のための表現活動でした。

この活動は、先に挙げたような方々がいる家族の物語を、家族全員が演出家になり、外部から参加する「役者」を動かして、自分たちの家族の物語を作る、ひいては家族の魅力を発掘するというものです。この内容であれば、オンラインでの活動でも対応は可能でしたし、何よりもワークショップの会場に移動しなくても、在宅のままで参加できるし、趣旨にも沿っている、という条件を全て満たしていましたので、今年度は、昨年度までとは内容は大幅に変更して、オンラインで「ファミリーシアター」をすることにしたわけです。

全４回、４家族の物語を作ったわけですが、オンラインならではの成果もいくつかありました。一つは、参加者が県外、国外から集まったということです。また、病床で生活している方が参加してくれたことです。そのように参加された方々の中には、演劇もダンスもしたことがない方もいましたが、「誰かのための作品を作る」という状況では、自信に満ちた見事なパフォーマンスを披露しました。

家族の魅力を発掘してそれを物語にしていく。この取り組みは、これまで私たちが求めてきた想いを体現したものでありました。奇しくもコロナ禍で様々なことが制限されている中で、一番シンプルに魅力を発掘できたのかもしれません。来年度も引き続き、地味なことでも魅力に変える方向で進めていきたいと思います。

日常生活の中で、どんな地味なことでも魅力に変える

身体表現ワークショップ

参加者感想より

○ 言葉を選んでのコミュニケーション、相手に対しての表現、自然に思いを考えながら、日中支援、表現活動に組み込むきっかけができたとおもいます。

○ 自分の思わぬ思い出が出現して、あったかい気持ちになりました。過去の自分に対して、ついダメ出ししてしまう私ですが、過去の出来事を肯定的に捉えられるようになりました。

○ オンラインでも、素敵なことは十分できる！と実感しました。

○ ファシリテーションの間や進め方に感嘆たる思いです。演者としても臨場感があり、Nさんが最後の感想で言われた他人家族の物語をでっち上げる抵抗感を持ちつつもユーモア満載なために皆が平和に参加でき、だけども目に見えないものが胸に残る感覚を得て、すごいことだな～と感じました。

○ 国や生活スタイルを問わず、同時にいろんな方々と表現活動を楽しむことができるのだと改めて実感しました。また、ファシリテートするには、全体と個別の事情や背景など、マクロとミクロの視点を常に持つ必要があることも実感でき、いい学びとなりました。

○ 離れているからこそ。 ネットだからこそ。
出来る事が有るし、今後の可能性を実感しました。

○ 普段施設では1度に大勢の人達に対応することが多く、また表現活動の時間に参加できる方は比較的障害の軽い方が多いので、体を動かすことがままならない方でも、さまざまなやり方で互いに巻き込み巻き込まれ刺激を与え合い、楽しいコミュニケーションになるのだと再認識できました。

○ 1人の方にスポットを当てつつ、周りの人達も表現を楽しむことができる、とても面白いメニューでした。

ファミリーシアター紹介動画

外出が難しい障害のある方がいらっしゃるご家庭、活動に制限があるけれど社会貢献に関心がある方やそのご家庭、病院など一定の場所の限定がある方やそのご家庭を対象とした、訪問型の演劇「ファミリーシアター」を紹介した動画を youtube でご覧頂けます。

障がいのある方の創作活動にまつわる

権利擁護について

障がいのある作家の権利を護りながら、安心して作品を取り扱うために必要なコト。
2名の講師による「基礎講義」「事例紹介」「お悩み相談」を通して、
「創作活動にまつわる権利擁護」の基本的な知識や考え方を身につけましょう。

障がいのある方たちの作品を展示するとき、販売するとき、グッズ化するとき…
表現を発信していく過程で、作者の権利をどのように考え、護っていけばよいでしょうか。
弁護士の安永恵子氏・まるの樋口龍二氏を講師として招き、「権利擁護」に関するセミナーを開催しました。
オンライン参加とアトリエ参加のあわせて18名が来場し、安永氏による基礎知識の講義と、樋口氏による事例紹介を通して、障がいのある作者の権利を護りながら作品を取り扱っていく上で必要となる「所有権・著作権」などの基本的な知識や考え方を学びました。 後半のお悩み相談では、参加者が質問や相談を投げかけ、講師から直接の回答やアドバイスを受けることができる機会となりました。

講師　**樋口 龍二氏**（NPO 法人まる）
　　安永 恵子氏（弁護士／安永法律事務所）

［日時］令和3年2月19日（金）
［参加］18名（アトリエ3名／オンライン15名）
［会場］オンライン（Zoom）＋アトリエ・サンク

〈 相談事例 〉

Q. 作者に出展に関する許諾をとる場合、書面での許可が必要となると思いますが、こちらで内容を詳細に書き込んで作者は署名だけで大丈夫でしょうか？ 作者が内容を理解できない場合や署名ができない場合、ご家族に求めますか？ 家族もいない場合はどうしますか？

A. 契約書に内容が詳細に書かれていて、口頭説明も行ったうえで、作者本人がしっかり説明を理解されているのであれば、本人の署名をしていただければ大丈夫です。捺印もしてあればより丁寧ですが、実印でない限りはそこまで意味はありません。また、作者が内容を理解できていない場合、法律的には「意思能力がない」と判断されるため、成年後見人を選任する必要があります。ただ、この契約ひとつのために成年後見人を選任するのは難しいと思います。そういう時は、できる限り本人に理解可能な形で内容を提示し、なんとなくでも本人の了承を受けましょう。また、本人が署名をできない場合は、ご家族の方に署名をお願いするのが一般的ですが、ご家族がいない場合でも、ご本人がしっかり意思表示できている場合は、スタッフが署名を代行することが可能です。（安永氏）

Q. 作品の価格や使用料はどうやって決めたらよいのでしょうか？

A. 原画の販売価格は、本人の意向やスタッフの意向のほか、世間での知名度など、さまざまな要素を加味して考えます。作品のサイズで決めるのもいいと思います。それに加え、複数の作家がいる団体であれば、作家ごとに S-A-B-C とランク付けを行うのもいいでしょう。ただし、スタッフが勝手に決めるのではなく、必ず「安くたくさん売りたい」「大事な作品なので高く売りたい」といった本人の意向を伺いながら進めるのが重要です。広告等への使用については、相手の予算や広告の規模によっても変わりますので、まずは先方の意向を伺うのが良いでしょう。その場合、「作品1点の使用につき〇〇円以上」といった基準を持っておくことをおすすめします。（樋口氏）

参加者感想より

○ 半世紀以上続く公募展を、当事者、支援者、市民が自由に参加できる形態のまま、権利保護を整えたいという思いで参加しました。

○ 事業所内で、絵画作品の複製販売・グッズ化の動きが出始めており、作家も事業所もお互いに安心して作品を地域の皆さんに広げる、つなぐために必要なことを考えたい、学びたいと思い参加しました。

○ 何年か前に息子の作品を勝手に色々商品化し、お金ももらえず、泣き寝入りしたことがありました。でも、勉強不足だった、と反省しています。

○ みなさま、同じようなポイントで悩まれていることが分かり、ちょっとほっとしました。 これを機に情報共有して乗り越えていく勇気をいただきました。

○ 契約や決まりは確認のために必要な形ですが、本人や家族、周囲の方との信頼関係・コミュニケーションが細やかに取れていることが大切と感じました。長い時間をかけて築かれた関係性を大事に、都度、話し合って1つずつ進めていきたいです。また、外部の団体（中間支援組織）に相談できることを改めて認識し、視野が広がりました。

○ オンラインでも開催されたので、九州外の他県の方の障害者アート現状も知る事が出来ました。

がばいアーティストたち　これ誰が描いたの？　vol.3

アートとしか言いようの無いものをTシャツにしてみました。

障がいのある作者をはじめ、障がいのある方の保護者・支援者、
佐賀大学芸術地域デザイン学部「地域創生フィールドワーク」の受講生などからなる
「がばいアーティストたち展」実行委員会によって形になった展覧会。

「T シャツをキャンバスに」をコンセプトに、県内外 23 名の “ がばいアーティストたち ” による 42 点の作品を T シャツにプリントし、美術館の外の通りから見える廊下に並べたマネキンに着せて展示しました。会場内の展示室では、T シャツにプリントされた作品の原画を含む 220 点以上の作品を紹介文とともに展示した他、制作中の様子を記録した映像がスクリーンで上映されました。

また、会場内にて「地域創生フィールドワーク」受講生らによる特別展示「つくる手のひら、とけあう心」を開催。学生と障害者の共同制作による大作の展示や、来場者に開かれたお絵描きスペース、「がばいアーティストたち」出展作家らによるライブペインティング、ワークショップなどさまざまな企画を実施し、展示タイトルのもととなっている「共に描くことがひとつのコミュニケーションとなり、心がとけあっていく」様子を会場内に再現しました。

展覧会「がばいアーティストたち　これだれが描いたの? vol.3」
［会期］令和３年１月19日（火）―１月23日（土）　［会場］佐賀大学美術館１階
［出展作家］23名　［出展作品］T シャツ 42 点・実物 200 点以上　［来館者］約 360 名

がばい
アーティストたち
Gabai Artis
アートとしか言いようのないものを、Tシャツにしてみました。

がばいアーティストたち　これ誰が描いたの？　vol.3

アートとしか言いようの無いものをTシャツにしてみました。

つくる手のひら
とけあう心

がばいアーティストたち　これ誰が描いたの？　vol.3

アートとしか言いようの無いものをTシャツにしてみました。

来場者アンケートより

○ 表現者としての“人”に“障がい”という形容詞をつけるのも“人”です。“障がい”を特別視しないで、作品の力だけで充分他人とコミュニケーションできる作品ばかりです。

○ 自由な表現、生きようとする力を感じた。

○ 障がいを持つ人と健常者が共に笑顔で生活していきやすい世の中に近づくような1コマを見せていただきとても感動しました。

○“障がい”という言葉がなくなり、一個人として多様性の一部として、社会が成り立つことを願う者です。未来へつなげていく一歩として行動されていること、素晴らしいと思います。私も自分にできることをしていきます。

○ 原画展が深みを持してくれて、Tシャツのストーリーがとても見えて良かった。

○ アーティスト本人さんを支援している方同士も出会えて交流できるのがすごくいいですね！

○ とても幸せな空間を体験できました。

○ 色彩の美しさ、発想の面白さ、根気の良さ、など、感じ方が素晴らしいと思いました。欲のない素直さがあります。

○ 作者についての説明を読んで作品を見ると作品を制作する際の心情を考えることができて面白かった。

○ 個々の広大な景観、無限大。

○ 障害のある我が子と同じ世代の作品もたくさんあり、一緒にやってみたいと思いました。

○ 色々な価値観があり一人一人の物語があることを実感しました。表現を自由にする！見習いたいです。

「がばいアーティストたち展」実行委員会による振り返り

○ 会場が「佐賀大学美術館」になり、“たくさんの方に作品を見てもらいたい、活動を知ってもらいたい”という目的があるのに、集客できるのか？と思いました。
しかし、最終日、会場係として参加したところ、朝から閉館まで途切れることなく来場者であふれました。
これまでよりも美術展らしく落ち着いて鑑賞ができたように思います。
今回はワイヤーアートやパソコン、立体・・と絵画のみならず幅広い作品がTシャツとなり、と同時に原画やそれ以外の作品展示、大きなスクリーンに日常の様子が動画で流れ、一度でより作家さんを知ることができました。

○（Tシャツの販売方法について）その場ですぐに申し込めないのは、購入意欲がとても下がる。オンラインだから申し込まなかった人もいるだろうから、検討の余地あり。販売数は見た人のイイねみたいなものだから、工夫して数が伸びたらイイですね。

○（原画同時展示について）原画がメインの展示となり、来てくださった方の滞在時間は大幅に伸びた。マスコミの方の周知関心もとても深まって良かったと思う。

○ コロナ禍の中、どれほどの集客や展示ができるのだろうと思うばかりでした。（作品の展示では）前回の商業施設での設営とは違う、充実感がありました。
壁面に参加アーティストの作品を一枚ずつ展示していく際も、ただ並べるだけではなく、美術館の白くて広い壁に、アーティストの作品への思いも一緒に展示していきました。
前回までとは違った客層で、美術館の評議員の方や、福祉系の大学教授、芸術家の方が観て下さって、美術館で開催した事で、少し重みを感じる事が出来ました。
私が、支援する二人の作家にも、刺激のあるいい機会になったと思います。

第4回 スター発掘プロジェクト in 佐賀

歌う！ 踊る！ 奏でる！ 演じる！
障がいがあってもなくても、人前でパフォーマンスをして楽しませたい人、大集合！
パフォーマーと観客が一体となって楽しむステージ & 動画上映会！

「ステージ・パフォーマンス」と「動画上映会」の二つのイベントを開催。２月13日、アバンセホールでの無観客開催となった「ステージ・パフォーマンス」では、即興演劇や楽器演奏、絵本の読み聞かせなど、８組のパフォーマーが迫力のパフォーマンスを披露しました。２月27日にオンラインで開催された「動画上映会」では、ステージのダイジェスト動画の他、歌唱・演奏・ダンス・大道芸・デジタル絵本など12組による多種多様なパフォーマンス動画を、出演者・観客を含む32名で楽しみました。

両日ともに、弁護士や学芸員、デザイナーなど、さまざまな分野の専門家が、それぞれの演目にコメントを行うコメンテーターとして参加。上手下手ではなく、「ここにインパクトがあった」「自分の専門分野からこのように見えた」など、ポジティブで多面的な評価コメントを行うことで、パフォーマンスのポテンシャルを引き出す視点を共有し、監修・総合司会の小松原氏とともに肯定的な場づくりを行いました。

監修・総合司会　**小松原 修氏**（ドラマディレクター／うれしの特別支援学校）

【ステージ・パフォーマンス】［日時］令和３年２月13日（土）
［会場］アバンセホール（佐賀市天神３丁目）／［参加］18名／［出演］８組
【動画上映会】［日時］令和３年２月27日（土）
［会場］オンライン（Zoom）＋アトリエ・サンク／［参加］32名／［出演］12組
【コメンテーター】秋山 沙也子氏（佐賀県立博物館・美術館）／嶋立 久人氏（シムアットデザインラボ）
西村 史彦氏（就労継続支援Ｂ型事業所 GENIUS）／安永 恵子氏（安永法律事務所）

TipWop（即興演劇）

山崎悠希（絵本朗読）

マルオ（ギター弾き語り）

第4回 スター発掘プロジェクト in 佐賀

森田宗一郎（和太鼓演奏）

Tommy（ギター弾き語り）

諫早特支オーケストラ , Pythagorasoul

たかまさ・よしこ（ダクソフォン＋アコーディオン）

参加者感想より

○ 多様な作品で、想像以上のバラエティさに、ビックリしました。 まだまだ、未体験、未遭遇のお宝が沢山あるのではないか？ とワクワクしております。

○ 自分自身でわからなかった自分の良さがわかったり、他の人から刺激を受けてこれからもっと精進していきたいと前向きに思えるようになりました。

○（ダンススタジオの）生徒さんにも、観ていただいたのですが、凄く驚いていました。障がい者アートに対する概念が、音を立てて変化したようです！

○ とにかく楽しくて、幸せな時間でした。SANC のイベントのたびに、いろんな方々と繋がれて、自分の交友関係も価値観も、すごい勢いで広がっていきます。これをさらに拡大して、社会全体をもっと面白くしていきます！

○ 多種多様のパフォーマンスを見させて頂いて、ものすごく刺激になりました！勝ち負けでは無い熱い情熱が集まる素晴らしさを実感。いい意味で「僕も頑張ろう」と思えます。ありがとうございました！

○ ウィズコロナの時代のおかげでリモート開催となり、佐賀県内に留まらず全国のアーティストを拝見する事ができたので、大変興味深かったです。この方法ならば国内だけでなく海外アーティストとも繋がる事ができるなと思いました。

「スター発掘プロジェクト」講師 小松原修氏によるふりかえり

今年度は、実際にステージに立ってパフォーマンスしていただく〈ステージ発表〉と、オンライン上で動画によるパフォーマンス作品を披露していただく〈動画上映会〉の2本立てで行いました。

「誰もが舞台に立つチャンスを」というこれまでの主旨を踏まえつつ、コロナ禍における安全への配慮と、挑戦する姿勢も大切にしてきました。昨年度に引き続き、学芸員やデザイナーなど3～4名の方にコメンテーターとしてご参加いただき、パフォーマンス一つ一つに、ご自身の専門分野などを踏まえた“魅力を高める”コメントを添えていただきました。

今年度ならではの面白さが随所に見られた今回の『スター発掘』ですが、中でも突出していたのが出演者同士のネットワークの構築だったかと思います。〈ステージ発表〉で出会った出演者同士が、個人的に連絡を取り合って共同作品を作るという話で盛り上がったり、『身体表現ワークショップ』に参加していた方が『スター発掘』で自作の絵本を披露したり、日程的に先に行った〈ステージ発表〉の出演者が、二週間後〈動画上映会〉で再び一堂に会し、一緒に動画を鑑賞してその衝撃に触発されたり、といった瞬間がたくさん生まれました。

これまで障害があるなどの理由で、ステージでの演奏はもちろんのこと、動画でも顔出しNGになるといったことは数多くありましたが、そんな困難な状況も今回は吹き飛ばしてくれました。〈ステージ発表〉では音源のみを流すというパフォーマンスが見られたり、〈動画上映会〉にアバターの姿で参加するパフォーマーがいたりと、顔が出せない、ではなく「敢えて顔を出さない」とプラス思考の発想に転じることで、逆に作品やパフォーマーの魅力がさらに高まったように感じられました。

今年度は、昨年度からの課題で、〈推し〉のパフォーマーを作ることにこだわってきましたが、生憎〈ステージ発表〉の日は関係者以外の観客は無しにしたので、これは来年度、仕切り直します。ただ、今年度遭遇した様々な困難さを越えたことで、魅力の発掘の仕方の幅が広がったように感じます。

佐賀大学芸術地域デザイン学部 地域創生フィールドワーク

「障害とアート」

佐賀大学芸術地域デザイン学部で「地域創生フィールドワーク」を受講する学生5名が“表現”をきっかけに障がいのある方とかかわり、障がいへの理解を深めました。

【見学・調査】佐賀市内の生活介護事業所やアートを専門とする福祉事業所の見学、障がいのあるアーティストへのインタビュー調査などを通して、障がいのある人たちや彼らを取り巻く環境に触れ、「障害」と「アート」の結びつきについて考えました。

【みんなで描くワークショップ】佐賀大学芸術地域デザイン学部ミクストメディア室にて「みんなで描くワークショップ」を開催。当日は佐賀大学の学生や障がいのある方、保護者、支援者など34名がワークショップに参加し、一緒に絵を描くことで、「障害／健常」の境界なく、フラットなコミュニケーションを楽しみました。

【成果展示】授業の成果発表として、特別展示「つくる手のひら、とけあう心」を開催。「ともに表現に取り組むことで心がとけあう、ひとつになる」というコンセプトのもと、上記ワークショップの成果作品と映像の展示、来場者に開かれたお絵描きスペース、「がばいアーティストたち」出展作家によるワイヤーアートのワークショップなど、会期中さまざまな企画が行われました。

また、同会場にて、SANC や展覧会実行委員会（→8 ページ）メンバーと協力して展覧会「がばいアーティストたち vol.3」を開催。障がいのあるアーティスト 23 名 220 点以上の作品展示とともに、出展作家へのインタビュー調査を通して作成した紹介文の公開などを行いました。

佐賀大学芸術地域デザイン学部 地域創生フィールドワーク

「障害とアート」

〈活動スケジュール〉

6月　ライフサポートはる訪問
　　昨年のコア科目学生の発表聴講
7月　福祉といった言葉などの
　　意味の共有
　　企画アイデア出し、企画決定
8月　「ジーニアス」見学
9月　「PICFA」見学
10月　企画決定
11月　「がばいアーティストたち」
　　出展アーティストへのインタビュー
12月　「みんなで描くワークショップ」開催
1月　成果展示会開催（佐賀大学美術館）

成果展示会

「つくる手のひら　とけあう心」

（会場掲示「ごあいさつ」より）

私たちはこの１年間、福祉事業所の見学や障がいのある作家への取材、ワークショップの企画などを行いながらさまざまな人たちと交流を重ね、“ 障害とアート ” について考えてきました。

昨年12月には学生が主体となって、学内でワークショップを開催しました。内容は、大きな紙やダンボール、ビニール、絵の具やペン等を用意し、そこに障がいのある人もない人も一緒になって絵を描いていくというものです。このワークショップの中で、私たちは「同じキャンバスへ一緒に描く」という行為それ自体がひとつのコミュニケーションとなり、それによって「健常者／障害者」の境界がなくなっていくように感じました。そしてその経験が今回の「つくる手のひら、とけあう心」というコーナータイトルにつながりました。

このコーナーでは、上記のワークショップを通して生み出された作品の展示と、当日の様子を撮影した動画の上映を行います。また会期中、これまでの経験をふまえて「制作活動を共に行うことで、健常者も障害者も関係なく、ひとつになる」といったコンセプトで参加型の作品制作に取り組んでいますので、どなたでもお気軽にご参加ください。

私たち佐賀大生と障がいのあるアーティストの皆様が共に創りあげてきた、そして、ご来場いただきました皆様とひとつになって創りあげる作品をお楽しみください。

佐賀大学芸術地域デザイン学部地域創生フィールドワーク - 障害とアート

アトリエ・サンク

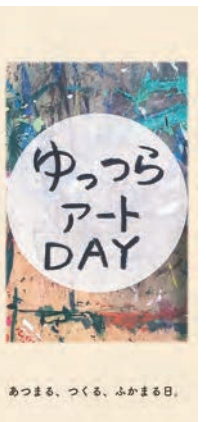
ゆっつらアートデイ

障がいの有る無しに関わらず、だれでも気兼ねなく集い、
自由に創作活動ができるアトリエ・サンク
月に一度のオープンアトリエ「ゆっつらアートデイ」

SANC は、自宅や事業所等でなかなか芸術活動を行えない方や、
汚れる心配をせずに思いきり絵の具で描きたい方などが、気軽に立ち寄り、安心して芸術活動に
取り組むことができるスペースとして、2015 年に「アトリエ・サンク」を開設しました。

アトリエ・サンクでは、障がいのあるなしに関わらず、どなたでも自由に創作活動ができる
機会として、月に一度のアトリエフリーオープン「ゆっつらアートデイ」を開催しています。
絵の具や色鉛筆、クレヨン、毛筆、粘土など各種画材の貸し出しも行っています。
（→詳しくは 41 ページを参照）

令和２年度は「完全予約制」「参加者のブロック分け」など、感染症予防の体制を整え、
2020 年６月から2021 年３月までの計８回「ゆっつらアートデイ」を開催。
延べ 130 名の方に「ゆっつらアートデイ」をご利用いただくことができました。



ATELIER
SANC
OPEN
10:00~16:00

アトリエ・サンク

ゆっつらアートデイ

参加者感想より

Q. アート活動を行うことで、どのような影響・効果を期待しますか?

○ アート=楽しい! という気持ちから色んなことにチャレンジしてみたいと姿勢が育つこと

○ 自由にできるのは楽しそう。熱中している

○ 言葉にできないことを表現できる

○ 表現方法の一つとして想いを伝えてほしい。絵を描くことでストレス発散が少しでも出来ればと思います。

○ 1人で過ごせる時間が増えたり、他の方たちと触れ合うことができること。アート活動があるといつもと同じように過ごせること。

○ 余暇活動を集中して行う機会になっています。
兄弟もできることが嬉しいです。

○ 活動を行うことで、今の自分の気持ちを確認することができます。

Q.「ゆっつらアートデイ」に参加して、変化したことがあればお聞かせください。

○ イライラしていてもゆっつらアートデイに参加すると、すっとなるようで、落ち着くことができています。1人でお絵描きすることが増えています。

○ 子どもたちとゆっくり関わる時間ができました。

○ いろんな画材に、色に興味がでてきた。

○ ゆっつらアートデイに参加していろんな方と対話する機会が増えてきました。話しかけたりかけられたりと。時間に関係なく絵の制作に没頭しやすくなってきました。私は1人暮らししています。家と違う場所で描くことは新鮮さを感じ気持ちが引き締まる思いです。

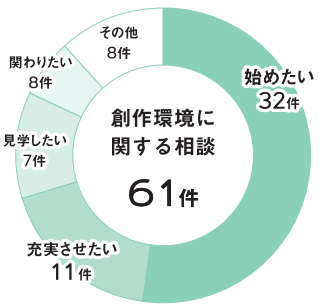
○ 絵を書く頻度が増えました。そのため余暇時間が充実したように思えます。集中する時間も長くなりました。

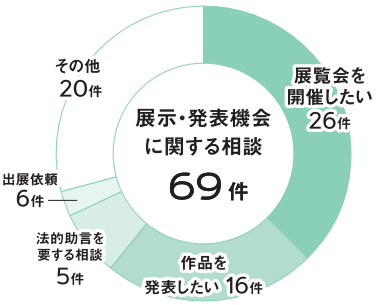
○ いろいろ。いろんな画材で試させてもらえる。
他の人と交流できる。

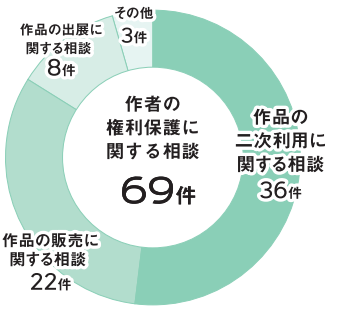
○ 色を塗ったり混ぜたり切ったり貼ったり楽しんでます。好きなだけ画材などを使えるので自由で楽しそうです→やりたいとを考える力がついたと思います。

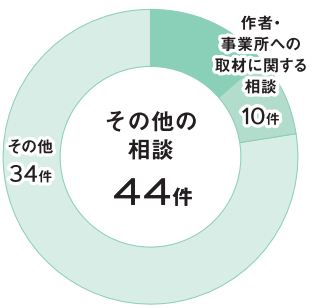
相談対応

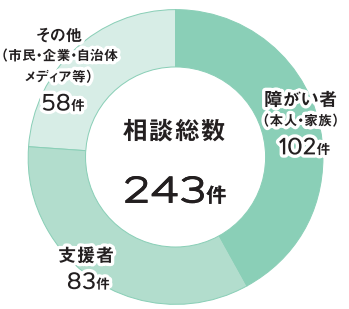
SANCでは、相談窓口を設け、創作活動の支援方法、作者の権利擁護、展覧会の開催や出展に関することなど、障がいのある方の芸術活動に関わるさまざまな質問を受け付けています。お気軽にお問い合わせください











【相談例】

創作環境に関する相談

○ 本人の可能性を伸ばすため、アート活動に関するアドバイスがほしい。

○ 美術サークル活動の運営について

発表機会に関する相談

○「スター発掘プロジェクト」参加者同士でコラボレーションを進めたいので協力してほしい。

○「がばい展」出展アーティストを紹介してほしい。

作者の権利保護に関する相談

○ 利用者さんの作品を使ってカレンダーを作りたい。

○ アトリエ・サンクで見かけた作品を購入したい。

○ 絵画作品の販売価格について。

その他の相談

○（作家の）ラジオ出演情報を告知してほしい。

○（新聞・TV 等）メディアに向けた展覧会の広報について。

情報発信資料

Web

SANC ウェブサイト

SANC Facebook

がばいアーティストたち vol.3 特設サイト

がばいアーティストたち vol.3 オンラインストア

各種メディア掲載

メディア		内容
テレビ	NHK 佐賀　ニュースだいま佐賀	「がばいアーティストたち vol.3」の紹介
	サガテレビ　ニュース	「がばいアーティストたち vol.3」紹介（※緊急 News で中止）
新聞	佐賀新聞	オンラインセミナーの紹介
	毎日新聞	SANCの活動紹介（連載記事「虹色のパレット」第２回）
	佐賀新聞	「がばいアーティストたち vol.3」の紹介
	佐賀新聞	「がばいアーティストたち vol.3」の紹介
	朝日新聞	「がばいアーティストたち vol.3」の紹介
	佐賀新聞	「スター発掘プロジェクト」の紹介
ラジオ	NHK 佐賀	「がばいアーティストたち vol.3」の紹介
Webメデイア	potari	「身体表現ワークショップ」イベント情報
	potari	「がばいアーティストたち vol.3」の紹介
	佐賀りあん	「がばいアーティストたち vol.3」の紹介
	さいこうアートプロジェクト	360 度オンラインアトリエツアー

障がいのある方の芸術活動に関する
お悩み・疑問、お気軽にご相談ください。

SANC では、相談窓口を設け、創作活動の支援方法、作者の権利擁護、展覧会への出展など、障がいのある方の芸術活動に関するさまざまな質問を受け付けています。
まずはお気軽にお問い合わせください。

ご相談例

- 自分の作品を発表したいのですが、どこか良い場所はありますか？
- 施設でアート活動を始めたいのですが、何から始めたらいいですか？
- アート活動を行っている事業所を教えてください。
- 絵画作品を、チラシやパンフレットなどに使えますか？
- 作家さんを紹介して欲しい。

アートを通じて、色んな人とつながりたい。

SANC では、障がいのある方の芸術活動に関わる
ネットワークの形成と充実を目指して、
障がいのある方・支援者・関心のある方など
さまざまな方々が出会い、
交流や情報交換を行うことができる
機会づくりに取り組んでいます。

どんな活動があるか知りたい。活動を伝えたい。

SANC では、アンケートや相談対応を通して、県内で開催される展覧会やイベントをはじめ、
障がいのある方の芸術活動に関するさまざまな取り組みの情報収集を行っています。
収集した情報や周知依頼のあった内容については、SANC ウェブサイトや SNS で発信します。

アトリエで創作し方い、体験してみ方い。

アトリエ・サンクでは、障がいのあるなしに関わらず、気兼ねなく集い
自由に創作活動ができる場として、毎月１度のフリーオープン日「ゆっつらアートデイ」を
開催しています。創作体験や見学も常時受け付けています。

アトリエ・サンクのフリーオープン日

ゆっつらアートデイ

ご利用例

・創作体験してみたい方　・普段の暮らしの中で創作活動が難しい方
・汚れる心配をせずに思いっきり描きたい方　・いつもと違う環境で創作したい方
・気がねなく集える場として　・情報交換の機会として

ご利用料金	アトリエの画材を使う場合	500円
	画材を持ち込む場合	200円
	見学・付き添い	無　料
開催予定	第3土曜日（10:00〜16:00）※要予約	

※日程は変更の場合があります。開催については、ウェブサイトとフェイスブックで告知いたします。

※新型コロナウィルス予防措置としてご利用の際には、事前予約をお願いしております。
※介助や支援が必要な方は、付き添いの方と一緒にお越しください。※車椅子の方もご利用できます。
※団体利用をご希望の方は、団体料金をご案内致しますのでお問い合わせください。

研修・ワークショップに参加し方い。

参加者の協働により展覧会を作り上げる研修、創作体験や身体表現のワークショップなど
芸術活動の支援のヒントにしていただける機会にご活用ください。

ご相談窓口

▶フォームから

▶電話から　080-2794-6195
▶メールから　info@s-brut.net

SANCの最新情報はWebサイトと
フェイスブックで発信しています。

▶SANC Web
www.s-brut.net

▶フェイスブック
www.facebook.com/sbrut.net

おわりに

今年度は新型コロナウイルス感染症の影響で、これまで実施してきたスタイルで開催できないことも多く、リモートでのプログラム実施などチャレンジングな1年となりました。

「会えない」「集まれない」ことの制約もありましたが、リモートで開催することによる新たな可能性もたくさん見つけることができました。

「身体表現ワークショップ」や「スター発掘プロジェクト」では、果たしてリモートでできるのだろうかという不安もありましたが、フタを開けてみると全国から参加してくださる方たちが集まり、リモートならではのパフォーマンスが生まれ、小松原さんのリードによって見事に成立・成功しました。

この経験は、これからプログラムを実施する上で、リアルかリモートかという二者択一ではなく、それぞれの良さを活用するハイブリットな実施方法について可能性を知る機会となりました。

さまざまなプログラムを実施していく中で、今年度も佐賀大学の学生さんたちとコラボレーションができました。佐賀大学芸術地域デザイン学部地域創生フィールドワークとの連携です。

学生の皆さんは、アートを行っている福祉の事業所を見学したり、作家の皆さんにインタビューをしながら少しずつ距離を縮め、同じ時間と空間を共有してみんなで描くワークショップで交わり、佐賀大学美術館での企画展として自分たちが感じてきたことを表現してくれました。

「“同じキャンバスに一緒に描く”という行為それ自体がひとつのコミュニケーションとなり、それによって“健常者 / 障害者”の境界がなくなっていくように感じました。」という学生さんの言葉は瑞々しく、社会という大きなフィールドにおいて、たくさんの可能性を秘めた新しい芽がムクっと地面から出てきたように思います。

SANC が実施している事業は「障害者芸術文化活動普及支援事業」ですが、障害のある人たちの創作活動や作品、そして作家の皆さん自身が、誰かと誰かをつなぎ、何かと何かをつなぎ、社会がより豊かになっていくことにつながっているように思います。

令和2年度のプログラムを実施できましたのも、協力委員の皆さま、講師の皆さまをはじめ、たくさんの方々にご協力いただいたおかげです。この場を借りてお礼を申し上げます。

そして、私たちにたくさんの楽しさやワクワク感、感動をいただいている作家の皆様に心より感謝いたします。

社会福祉法人はる　理事長
福島 龍三郎

令和２年度　佐賀県障害者芸術文化活動普及支援事業　報告書

SAGA ART BRUT NETWORK　2020 — 2021

［制作・発行］
社会福祉法人はる
SANC（Saga ArtBrut Network Center）

〒849-0917　佐賀県佐賀市高木瀬町長瀬1168-1
Tel: 0952-37-7078 / Fax: 0952-34-1024
Mail: info@s-brut.net
Web: www.s-brut.net

発行責任者｜福島 龍三郎（社会福祉法人はる 理事長）
制作・デザイン｜大石 哲也（SANC）
制作｜嵯峨 昌紀（SANC）

イラスト｜加茂賢一（P40 - P41）

補助｜令和2年度　佐賀県障害者芸術文化活動普及支援事業

表紙：「ゆっつらアートデイ」が終わった後のアトリエ・サンク
表紙裏＋P1：「つくる手のひら　とけあう心」展示風景

社会福祉法人はる

「私たちの願いは、障がいのある人たちが、自分の人生の主人公として、生涯を通して、地域とともに幸せに暮らしてもらうことです」という理念のもと、子どもから大人まで、生涯を通して地域で暮らすことができる体制を作ること、また、仕事や様々な活動を通して地域の方たちと触れ合ったり、協働することで、障がいのある人たちの生活が豊かになり、地域の理解も深まる活動に力を入れています。

〈実施事業〉
□ 生活介護事業所ライフサポートはる（定員20名）
□ 就労継続支援 B 型事業所ワークスペースかん（定員20名）
□ 居宅介護事業所ヘルパーステーションはる（行動援護・身体介護・家事援助）
□ グループホーム（定員31名）
□ ショートステイ（定員6名）
□ 放課後等デイサービス事業所じゃんぷ（定員10名）
□ 相談支援事業所ほっと
□ Saga ArtBrut Network Center（SANC）
□ 佐賀県強度行動障害支援者養成研修
□ きてみんしゃいカフェ